

『行人』論——一郎の発見、そして一郎の求めた世界へ——

稲垣政行

『行人』に関して、「塵芳」とそれ以前の章との間にある「裂け目」を伊豆利彦氏によって指摘されてから久しい。以来、作品の破綻を主張する氏の見解は、『行人』研究に大きな波紋を投げかけてきた。そして、今尚その「裂け目」の問題が大きく残っている原因は、一に二郎の語りの内実について、氏の説に代わる整合的な見解が示されて来なかったことにあると言つてよい。すなわち、語り手である二郎の言う、

自分は今になつて、取り返す事も償ふ事も出来ない此態度を深く懺悔したいと思ふ。

この作品はへ取り返す事も償ふことも出来ない、形で事件

が起つてしまった今になつて、へ深く懺悔したいと思ふ二郎によつて語られていた

と言える。すると、この氏の指摘が動かない以上、二郎が「懺悔」しなければならぬような何が起つたのかという彼の語りの内実が問題となる訳だが、直との「無意識の愛」を認め二郎の「虚偽」が、一郎を「狂気にかりたて、悲劇においやつた」ことをその内実とした氏の説に代わる整合的な見解が示されて来なかつたために、その「悲劇的な結末」が「塵芳」章に

描かれないまま「何とか悲劇を回避したいという願望でこの作品が終らせられている」ことによつて、そこに「蔽いかくせない裂け目が露呈している」とした氏の指摘もまた解決されずに残つてきたのである。

これに対し、私は別稿において、直に性的に引かれることへの禁忌の意識（罪の意識）から、「不安」と恐怖に晒され猜疑の眼を身につけた二郎が、一郎を発見することで回心に至つたことを彼の語りの内実として述べた。そして、両者が二郎を正常とすれば一郎が異常に、一郎を正常とすれば二郎が異常に見えるという関係にあり、さらにその対照関係が「友達」とHの手紙によつて作品に構造化されていることを述べた。本論では、そうした『行人』の作品構造を具体的に跡づけるとともに、二郎の語りの内実である一郎の発見による彼の回心の持つ意味について明らかにすることを目的とする。

—

『行人』は「友達」の章から始まる。そこで二郎が語っている内容は、彼が「母から依託された用向」（一）と「私の都合」（同）によつて大阪の岡田の家を訪れていることから、大き

く二つに分けることができる。一つは貞の縁談を纏める使者としての彼の岡田夫婦とのかかわりについて、もう一つは彼と三沢の友人としてのかかわりについてである。藤沢のり氏はこの二つの用件への二郎の対応に、「(長野家)に拮抗するだけの(私)を持たない」二郎の「存在性」の一端を見ているが、表向き貞の縁談の使者に立てながら、その実彼を大阪で独立させようとする両親と岡田夫婦の策略に乗せられていることに気づかない二郎の一面の「呑気」(「帰つてから」三十三)さには、正にそうした彼の「存在性」が現れていると言える。しかし、異性がかかわることによって、たやすく「性の争ひ」(「友達」二十七)へと様変わりした三沢との友人関係には、二郎の持つもう一つの「存在性」が現れているのである。それは、性の呪縛に掬め取られ、その「暗闘」(同)を繰り返す二郎の存在のありようである。

この後者の二郎のありようは、三沢との「性の争ひ」について語る彼の言葉の中に露呈している。と言うのも、「何うする」了簡もない(「友達」二十七)異性であるにもかかわらず、尚「あの女」と三沢とを「悪意にしたくなかつた」(同)という二郎は、その「我儘と嫉妬」(同)を「露骨に云ふ事が出来なかつた」(同)自身の「卑怯」(同)について、

浅間しい人間である以上、是から先何年交際を重ねても、此卑怯を抜く事は到底出来ないんだといふ自覚があつた。

(同)
と語っているからである。ここで、二郎は抗いがたく性に操られる自身のありように気づいている。また、「心細く」(同)、「悲

しく」(同)なつたとも語る彼は、「是から先何年」でもその力によって「暗闘」へ引き込まれるであろうことも予感している。そして、そのような闇を生きる二郎の世界を象徴しているのが、そこに表された三角の構図である。

その構図は、胃病で入院した三沢の病室に現れる。たとえば窓、それは「正面に二つ側面に一つ」(「友達」十三)あり、三角を形作っている。そして、布団を敷いて寝る三沢にその窓から見えるものの一つが「筋違」(同)の電線であり、彼の病室は「三階」(「友達」十二)にあつた。また、後に入院して来た「あの女」の病室は三沢の病室の「筋向ふ」(「友達」二十)に「斜め」(同)に位置しており、そこに三沢の病室から見ることできたものが「三角」(同)の床の裾であつた。二郎と三沢を初め二人の看護婦までが「性の争ひ」を演じる病室は、このように幾重にも三角の構図の中に封じ込まれている。そして、その構図が意味しているものは、言うまでもなく「性の争ひ」を示す三角関係である。

この三角の構図は、この他にも至る所で示されている。そもそも、二郎の友人の姓が「三沢」である。そして、二郎の身につける帯が「三尺帯」(「友達」十二)であり、彼が下宿した部屋には「筋違」(「塵旁」七)の棒を書いた幅物と、「三尺の床」(「塵旁」二)があつた。その上、一郎の名に二郎を加えれば「三」が出て来るといふように、二郎はどこまでも三角の構図と繋がっている。従つて、そのことは直をめぐる一郎との関係にも当然及ぶ筈であり、事実二郎自身も予感していたとおり、彼は「暗闘」に引き込まれて行くのである。たとえば、事の発端とも言

うべき和歌の浦の権限の場面「直は御前に惚れてるんぢやないか」〔兄〕十八)と一郎から打ち明けられるこの場面、二郎は石段を「筋違に」〔兄〕十七)歩いてゐる。あるいは、直と二郎が宿屋に泊まる場面、坂口曜子氏も指摘するところ、そこで直は絹張りの傘を「斜に」〔兄〕三十四)土間に突いてゐる。彼らには、その関係の内実を問われる重要な場面、このように三角の烙印が押されている。そのことは、直の「節操を試す」〔兄〕二十四)ために和歌山を訪れた夜、二郎が彼女から「狎れ易い感じ」〔兄〕三十八)を受けてもいるように、嫂と義弟という「表面の形式」〔兄〕十八)の裏側で、互いに異性として引き合い、「狎れ」あつてゐる彼らの関係の内実を示してゐると言える。そして、その直との関係によつて知らず知らずのうち一郎との「暗闘」に引き込まれて行く二郎は、やがて禁忌の意識によつて「不安」と恐怖に晒されることになるのである。ところで、二郎がそのように一郎との「暗闘」へ引き込まれて行く経緯には、直の存在のありようが深くかかわつてゐる。と言うのも、彼女に引かれることで「不安」と恐怖に晒されて行く二郎とは異なり、直は嫂と義弟という「表面の形式」の裏側で、むしろ意識的に異性として彼と「狎れ」あつてゐるからである。「ギヤマン細工」〔兄〕三十二)の涙で二郎を「釣」(同)することもできる彼女は、巧みに嫂と一人の異性としての顔を使い分け、二郎を「翻弄」(兄)三十八)する。彼女が「八幡の藪知らず」(兄)三十九)のように不可解に見えるのは、二郎が鈍感だからではなくむしろ敏感だからであり、そしてその敏感な彼の感性の捉えた直の本性が、「柔かい青大将」(帰つてか

ら)であつた。重松泰雄氏も指摘するように、直は「蛇性の女」であり、その彼女の本性が次の記述のうちに表されてゐる。

兄は谷一つ隔て、向ふに寝てゐた。是は身体が寝てゐるよりも本当に精神が寝てゐるやうに思はれた。さうして其寝てゐる精神を、ぐにや／＼した例の青大将が筋違に頭から足の先迄巻き詰めてゐる如く感じた。自分の想像には其青大将が時々熱くなつたり冷たくなつたりした。夫からその巻きやうが緩くなつたり、緊くなつたりした。兄の顔色は青大将の熱度の変ずる度に、それから其絡みつゝ強さの変ずる度に、変つた。

〔帰つてから〕(一) ねつとりと一郎を「筋違」に巻き詰めるこの「青大将」は、性的に纏りつき、その「暗闘」へと引き摺り込むことで一郎(あるいは二郎)を摺め取ろうとする直の本性である。二郎と一郎の二人は、それぞれ「濡鼠」(兄)十四)と「針鼠」(帰つてから)一)にも擬されており、あたかも直の餌食のようでもある。そして、そのような二郎は、直の「節操を試す」ために訪れた和歌山の地で、囚らずも「一日一晚」(兄)四十三)を共に過ごすことによつて、抗いがたく彼女の呪縛に捕えられ、一郎との「暗闘」に引き込まれて行くことになつたのである。

その二郎と直の二人が「一日一晚」を過ごすこととなつた和歌山の地は、元の紀州藩の城下町である。従つて、城はその地を象徴するものである筈だが、それは描かれてはいない。代わりに描かれてゐるのは城の石垣の下にある「濠」(兄)十一)であり、そこには「蓮」(同)が「紅の花」(同)を咲かせてい

た。紅蓮は炎を喻える花でもある。その花の咲く「濠」によつて象徴される和歌山の地は、蓮池が燃え上がるという分荼離迦の世界、焦熱地獄の隱喩である。そして、和歌の浦が暴風雨に包まれ、直とその地に留まることとなつた二郎は、「眉を焦す火の如く」(「兄」三十三)母と兄を思い出している。また、直と宿屋へ向かう途中、彼の頭は「火事場」(「兄」三十四)のよう廻転している。このあたかも地獄の業火に焼かれるかの如き表現は、三角の構図で示された直との不義の關係に陥り、罪悪感を募らせる二郎の心を暗示していると言える。しかし、彼女と「一日一晚」「暮した経験」(「兄」四十三)によつて一郎を「裏から甘く見る」(同)眼を身につけた二郎は、その直との關係を侮りの「態度」で一郎に偽り、さらに彼を「輕蔑し始め」(「兄」四十四)さえもするのだが、そのような二郎がやがて罰せられることとなるのが、再び直についての報告をめぐつて一郎と対した時である。

その日、直の報告について「空恍けてゐる」(「帰つてから」二十一)輕薄さを一郎に突かれ、「話を無理に横へ向けようとした」(「帰つてから」二十二)二郎は、かつて和歌の浦で一郎の言つた「信用してゐる」(「兄」二十三)という言葉逆手に取り、揚げ足を取っている。そして、一郎が「自分の強い言語に叩かれたのだ」(「帰つてから」二十二)と高を括り「驕つてゐた」(同)瞬間、一郎の怒鳴り声によつて「予想外の驚きを心臓に打ち込」(同)まれている。これは単なる強調の表現などではなく、「己の虚栄心を満足させる為の手段らしい態度」(「帰つてから」二十一)、一郎を侮り偽る「態度」で彼の書齋を出入りし

た「得意の瞬間」(同)を一郎に突かれ、二郎が「死地」(同)に陥られたことを意味していると言つてよい。事実、この日を境として長野家の食卓には、二郎が「黙つて仕舞つた」(「帰つてから」二十三)ために、「蟬の音」(同)が「肌寒の象徴」(同)のように響いている。また、二郎自身一郎との一件をふり返り、「怒るべき勇氣の源が既に枯れてゐたやうな気がする」(「帰つてから」二十五)と言ひ、「幽霊」(同)のようになつてしまふ彼は、たと言つている。その上、長野家からいなくなつてしまふ彼は、あたかも死んでいるかのようであり、そのことは直との關係を偽つた彼が罰せられたことを暗示していると言ふことができる。そして、そのような二郎の眼に見えて来る光景が、次のようなものである。

其未来を織る糸のうちには、自分に媚びる花やかな色が、新しく活けた佐倉炭の焰と共にちら／＼と燃え上るのが常であつたけれども、時には一面に変色して何処迄行つても灰の様に光沢を失つてゐた。(「塵勞」一)

ここで二郎が垣間見ている「灰の様」な未来の光景、地獄の業火に焼き尽くされた跡のようなその光景は、長野家を出て行つた彼を直の「幽霊」(「塵勞」六)が「追ひ廻」(同)し、二人の出入りする長野家が「幽霊屋敷」(「塵勞」十)と表現されているように、二郎の陥つた「死地」の光景であり、一郎を偽り罰せられた彼の辿りつつある未来の光景である。そして、彼を魅惑する「花やかな色」は、知らず知らずのうちにそうした場所へと二郎を誘う性の悦楽である。直に囚われ、一郎との「暗闘」を生きた二郎の前途は、そのように「灰の様」な「死地」

へと続いている。そして、「不安」と恐怖に晒される彼の必要としてゐるものは、そのような場所から自己を救済する方途である。

二

直と一郎の二人は、それぞれ和歌山と和歌の浦において、それまで見せることのなかつた一面を二郎に対して見せてゐる。たとえば、直は「猛烈で一息な死方がしたい」(「兄」三十七)と言ひ、一郎は「何うか己を信じられる様にして呉れ」(「兄」二十一)と言う。そのような二郎にとって「始めて」接する彼らの一面は、「無気味さ」(「兄」三十八)や「精神に異状を呈する」(「兄」二十一)前触れとしてグロテスクなものに見えており、そのことは藤沢氏に拠れば、「長野家」の言葉の圈内に生きてきた二郎と彼の言葉」とが、彼らの「長野家」と隔絶した地平からの言葉」によつて「腐蝕」されたことを意味している。ところで、二郎にとつてグロテスクに見えた一郎の一面は、彼からHへと語り手が入れ代わつた時、どのような相貌を見せるであらうか。それは、彼を「尊敬」(「塵勞」四十二)するHに「習慣的な言説」(同)よりも「難有」(同)いものとして受け止められることで新たな相貌を見せ、彼との「一」の關係の世界を形作ることになる。

我々二人は一所の室に寝ます、一所の室で飯を食ひます、散歩に出る時も一所です、湯も風呂場の構造が許す限りは、一所に這入ります。

(「塵勞」二十八)

これが旅に出でからの二人の行動であるが、その彼らが最後

に落ちついた場所は、紅が谷の「一軒家」(「塵勞」二十九)であつた。そして、二人はそこでもやはり「一つ座敷」(同)に吊つた、「一つ蚊帳」(同)の中に寝てゐる。「僕の心は宿なしの乞食見たやうに朝から晩迄うろくしてゐる」(「塵勞」三十三)と言ひ、これまで「何処へ泊つてもよく寝られなかつた」(「塵勞」二十九)一郎が、ここへ来てからは「よく寝」(同)るようになつてゐる。この紅が谷の「一軒家」は、そのように彼の落ちつける「宿」であり、彼とHとが「一つ」になる「一」の關係の世界である。

なるほど一郎の名は「一」である。しかし、二郎と三沢、一郎とHという二組の友人關係の中で、一郎の友人にのみ数字が現れないのは何故であろう。「三沢」という名に三角の構図との繋がりがあつたように、一郎の友人が「H」とされていることにも意味がある筈である。そのことについて小森陽一氏は、「H」が「I」と「I」の間に橋を掛けた図像」であり、一郎、二郎の頭文字とH・I・Jと連続することから、一郎と二郎の「I」と「I」との間における交通、自他の「固有性」を損わない關係を媒介する彼の役割の象徴的な意味を読み取つてゐるが、それとはまた別にもう一つの意味があるように思われる。それは、次の記述を通して知ることができる。

薄の根には蟹が這つてゐました。(中略)それが一匹ではないのです。しばらく見てゐるうちに、一匹が二匹になり、二匹が三匹になります。仕舞には彼処にも此処にも蒼蠅い程眼に着き出します。

「薄の葉を渡る奴があるよ」

兄さんは斯んな観察をして、まだ動かずに立つてゐます。

〔塵勞〕四十七

「一匹が二匹になり、二匹が三匹になる」蟹、一郎の名に二郎を加えれば「三」が出て来るように、この足し算は性の力の隠喩である。異性の引き合う力が、一人を二人に、二人を三人にして三角の構図ができあがる。そこへ一人、また一人と加わることで、三角の構図は無限に増加して行く。それはちょうど「友達」の章において、「あの女」の入院を契機に、二郎・三沢・二人の看護婦のそれぞれが、「性の争ひ」を演じ始めたのと同じである。そして、そのような足し算の世界から抜け出そうと、「薄の葉を渡る」蟹が一郎である。決して足し算になることのない世界、それが一郎の求める世界であり、その意味で彼の友人の姓には数字ではなく、アルファベットが与えられているのである。

そうした一郎とHの「一」の関係は、彼らが互いに互いを見る眼の中にも現れている。たとえば、一郎はHに「君の方が僕より偉い」〔塵勞〕三十二と言っている。そして、Hは一郎こそ自分より「優れてゐる」(同)と感じている。そのような二人の互いを見る眼は、次の場面に最もよく現れている。

私は黙々として熱烈な言葉の前に坐りました。すると兄さんの態度が変わりました。私の沈黙が鋭い兄さんの鋒先を鈍らせた例は、今迄にも何遍かありました。さうして夫が悉く偶然から来てゐるのです。尤も兄さんの様な聡明な人に、一種の思はくから黙つて見せるといふ技巧を弄したら、すぐ観破されるに極つてゐますから、私の鈍いのも時には一

得になつたのでせう。

「君、僕を単に口舌の人と軽蔑して呉れるな」と云つた兄さんは、急に私の前に手を突きました。

私は挨拶に窮しました。

「君のやうな重厚な人間から見たら僕は如何にも軽薄な御喋舌に違ない。然し僕は是でも口で云ふ事を実行したがつてゐるんだ。(後略)」

〔塵勞〕四十五

一郎が「神は自己だ」〔塵勞〕四十四と語つた場面に続いての記述である。ここで、「鋭い」神経と「鈍い」神経という対照を持つ二人は、互いに互いの新たな像を作り出し合っている。一郎はHと対すること、「重厚な人間」というH像と「軽薄な御喋舌」という自己像を作り、Hは一郎と対すること、「聡明な人」という一郎像と「凡庸」〔塵勞〕四十六、という自己像を作っている。そして、そうした彼らの四つの像は、Hの「聡明な人」という一郎像が「軽薄な御喋舌」という一郎の自己像を、また一郎の「重厚な人間」というH像が「凡庸」というHの自己像を補い、相補の関係を作り出している。「人間としての君は遙に僕よりも偉大だ」〔塵勞〕四十五と一郎が言い、Hが彼を「尊敬」し、その言葉を「難有」と言っているように、「和して納まるべき特性をどこか相互に分担して前へ進める」〔塵勞〕四十六)彼らの関係は、互いを通して互いの新たな像を作り出し、補い合うことのできる「一」の関係なのである。

この一郎とHの関係は、言うまでもなく二郎と三沢の関係との対照である。後者の関係は、たとえば三沢について、

此方が大事がつて遣る間は、向ふで何時でも跳ね返すし、

此方が退かうとすると、急に又他の袂を捕まへて放さない
〔友達〕二十七

とあり、

彼と自分との交際は従来何時でも斯ういふ消長を繰返しつつ、

今日に至つた

〔同〕

とあるように、互いの「我儘」の衝突である。二郎自身「一日も早く病人を見捨て、行かうとする自分の我儘」〔友達〕十五を自覚してもいた。「あの女」が入院して来たことであつて、「性の争ひ」を演じ始めたことからわかるとおり、彼らの関係はあたかも天候のように移り変わる不定形なものである。一郎とHの関係は、そうした彼らの関係の対極を示すものに他ならないが、ならばそこには、性の力に対しても、成す術もなく諦めていた二郎の対極に立つ態度が示されている筈である。一郎は次のようなことを言っている。

「椅子位失つて心の平和を乱されるマラルメは幸ひなものだ。僕はもう大抵なものを失つてゐる。纔に自己の所有として残つてゐる此肉体さへ、〔此手や足さへ〕遠慮なく僕を裏切る位だから」〔塵勞〕三十九

「〔此手や足さへ〕」というのは何か勘違いをしているHの注釈と思われるが、ここで一郎が語っているのは、彼が「性の争ひ」へ引き摺り込まうとする直の力と対峙しつつも、尚性的に彼女に引かれる自身のことについてである。そして、そのような一郎は、紅が谷の海岸にある別荘の「筋違」〔塵勞〕四十九の「暗い石段の上で、磯の香を嗅ぎながら」〔塵勞〕五十、香敵という坊さんについて語っている。彼の周囲に配された「筋

違」の石段・闇・「磯の香」は、すべて性の力の象徴である。その中で「一切を放下し尽し」〔同〕、悟りを開いた「香敵になりたい」〔同〕と一郎が語るのは何故か。彼が自身を束縛する性の呪縛から解脱しようとしているからである。蟹の隠喩にも明らかなように、また二郎が身を以て経験したように、性の力に癒着することは無限の争いの修羅場をしかもたらさない。一郎は「薄の葉を渡る」蟹のようにそこから脱け出そうとしているのである。そうした一郎の辿り着こうとする世界の風景は、たとえば次のようなものである。

私は川の真中の岩の間から出る温泉に兄さんを誘ひ込みました。男も女もごちゃ／＼に一つ所に浸つてゐるのが面白かつたからです。〔塵勞〕三十五

「ごちゃ／＼に一つ所に浸つてゐる」男女、一郎が「嬉しさを」〔同〕に眺め、「善男善女」〔同〕と言う彼らは、三角の構図に封じ込まれた男女の対極である。そして、「性の争ひ」のない、男も女も「一つ」であるようなこの場所は、性の力学から解脱しようとする一郎の求める世界である。そこは一郎の言う「絶対の境地」〔塵勞〕四十五、「自分」〔同〕が「有るとも無いとも片の付かないもの」〔同〕になつて、「絶対即相對」〔同〕の世界でもあるだろう。男も女も「一つ」であるような場所では、性は「有るとも無いとも片の付かないもの」であり、そのような場所においてこそ初めて性的存在としての人間は「有るとも無いとも片の付かないもの」になる筈だからである。一郎が求めている世界は、そのように男と女の性差が無化するような、融合するような、いわば両者から等距離であるような場所

だ。そして、そのような世界を求める一郎をやがて見出すことになるのが、「灰の様」な未来を垣間見る二郎なのである。

三

三〇に象徴される二郎の世界と、三一に象徴される一郎の性、この二つの世界を隔てているものは、既に見たように、性の力学に対する二人の「態度」の取り方の違いである。そして、それはこの二人の場合、直がかかわってきた時に互いに対する「態度」の取り方の違いとして現れ、彼らそのものを隔てる差異でもあった。事実、直の「節操を試す」ことを依頼された二郎は、彼を「信じてゐる」(「兄」二十五)と言つた一郎の言葉を、そのまま受け止めることができなかつた。むしろ、一郎の言葉の奥に「何か深い意味が籠つてゐるのではなからうか」(同)と「疑ひ」(同)、彼を「真正の精神病患者」(同)と「断定」(同)したりさえしている。これは、事が直という異性と彼らの関係の問題であるだけに、二郎が三沢との「性の争ひ」の経験から、「嫉妬」を「露骨に云ふ事が出来なかつた」自身と同じように一郎を見ているためと言つてよい。いわば、一郎は二郎が「露骨に云ふ事が出来なかつた」ことを言っているのであり、それを「到底出来ない」と諦めていた二郎には、一郎が異常に見えるのである。二郎の語りに見られる二人の異常、正常の対立は、そのような一郎を見る二郎の眼によるものであり、二人の性の力学に対する「態度」の取り方が反映されたものである。そして、その一郎を異常と見る眼によつて彼から隔てられた二郎は、直に囚われ、一郎を偽り、「不安」と恐怖に晒され

る時、彼がどの程度自分を「憎んでゐる」(「塵勞」二十一)か、また「疑つてゐる」(同)かを知ろうと、Hに旅の報告を依頼することになる。罪悪感に駆られる彼の意識は、三沢との「性の争ひ」で味わたつた、「心細く」、「悲し」い孤独に通じているだろう。一郎とHが旅立つた日の夜には、彼は「暗い所に黙つて坐つてゐた」(「塵勞」二十七)のである。そのような彼が、「自烈たい」(「塵勞」二十八)思いで待ち焦れていたHの手紙は、彼に何をもたらしたのであろうか。

自分は机の前に縛り付けられた人形の様な姿勢で、それを読み始めた。自分の眼には、この小さな黒い字の一点一画も読み落すまいといふ決心が、焰の如く輝いた。自分の心は頁の上に釘付にされた。しかも雪を行く櫓のやうに、其上を滑つて行つた。
(「塵勞」二十八)

ここで二郎が「人形」に準えられていることに注意したい。「人形」は何か操られるものである。たとえば、二郎を大阪へ呼び寄せるために仕組まれた貞の縁談にその相手として利用されていた佐野は、「義太夫」(「友達」十)を勉強している。そして、彼が岡田夫婦を交えて二郎と会食していた時、彼らの座敷の向こうでは一人の男が「踊」(「友達」九)を踊っていた。これは佐野が岡田夫婦に操られていることの隠喩である。彼は「人形」のように操られることで身を以て人間を操る術を教わっているのであり、彼が「義太夫」を勉強しているのはそのことの隠喩である。

あるいは、直にもまた彼女が「人形」であることの暗示がある。彼女は二郎に言っている。

妾や本当に腑抜なのよ。ことに近頃は魂の抜殻になつちま
つたんだから (兄)三十一

「腑抜」も「魂の抜殻」も、共に「人形」を暗示する言葉で
ある。そして、彼らが語り合っている時には、「三味線の音」(兄
三十)が鳴つてもいた。これは彼らが「人形」のように性の力
に操られていることの隠喩である。従つて、

おれが霊も魂も所謂スピリットも攫まない女と結婚してゐ
る事丈は儲だ (兄)二十

と一郎が言うのもいわば当然のことであり、そのような直に一
郎を「裏から甘く見る」ことを「教はつた」(兄)四十三)二
郎もやはり性に操られる「人形」であり、「魂の抜殻」である。
その上、二郎は佐野と同様に岡田夫婦と両親の策略に乗せられ
人間を操る術をも教わつていたのであり、そのような「人形」
としての彼が身につけたものは、「向の隙を見て事をするのが賢
いのだ」(兄)四十三)という「利害の念」(同)であつた。「今」
の二郎は、そのような自身を「人格の出来てゐなかつた当時の
自分」(同)と相対化する眼を身につけているが、それは彼が「人
形」のような存在から脱け出すことによつて初めて得られる筈
のものである。言つてみれば、「今」の彼は「人格」的成長を遂
げている訳であり、そしてその契機となつたものが、「人形の様
な姿勢」で彼が読み始めた日の手紙である。

その手紙が届いた時、一郎がどの程度自分を「憎んでゐる」
か、また「疑つてゐる」かを知ろうと読み進む二郎にとつて、
日のなげない次の一言ほど注意を引くものはなかつたであろ
う。

たゞ御参考迄に一言注意して置きますが、兄さんは其時御
両親や奥さんに就いて、抽象的ながら云々されたに拘らず、
貴方に関しては、二郎といふ名前さへ口にされませんでし
た。(塵勞)三十七

直と両親を「偽の器」とした一郎が、彼らに操られ「向の隙
を見て事をするのが賢いのだ」という「利害の念」を身につけ
た二郎について、何事も語らなかつたのは何故か。彼が二郎を
信じているからである。彼は言っている。

疑ぐられては困る。實際僕の云つた事は云つた事で、云は
ない事は云はない事なんだから (塵勞)五十一

かつて、一郎は二郎に対して「信じてゐる」と言つていた。
その言葉を信じていることができず、さらに罪の意識から一郎に猜
疑の眼を向けていた二郎は、ここで初めて一郎が「本式の本当」
(兄)四十一)を言つていたことを知り、彼を発見する。「向
の隙を見て事をするのが賢いのだ」とした自身を、「人格の出来
てゐなかつた当時の自分」とふり返る二郎の眼は、直と両親を
「偽の器」とした一郎の眼と同質であり、彼がそのような眼を
獲得したのは、ここで一郎を発見し、それまで彼の持つていた
異常・正常の図式が反転したことによるのである。そして、世
界が新たな秩序を持つて見え始め、一郎を侮り偽つた自身の「態
度」を「懺悔」する「誠」を得た二郎の「心」が、日の手紙を
「雪を行く櫓のやうに」「滑つて行つた」とあるように、「浄化
された」のは坂口氏の指摘するとおりである。いわば、一郎に
よつて「魂」を吹き込まれた二郎は、深く「懺悔」し一郎の求
めた世界を目指す。その時、彼の前途にあるものは、「灰の様」

な未来を吹き払い、「空を突くやうに聳えて」(「塵勞」二十九) いる「高い松」(同)である。

一郎とHが「高尚な課業」(「塵勞」二十九)として見上げていたように、この「高い松」は、一郎の求めた世界の象徴である。「松」は「節操」を象徴する木であり、かつて一郎は直の「節操」を問うてもいた。そしてその他に、この「松」はもう一つの重要な意味を持っている。それは、後に続く者への「標榜」としての意味である。

「塵勞」章に出て来る香嚴の師、百丈禪師の流れを汲む臨済に關して、「臨済栽松」という公案がある。これは、臨済の師、黄檗が、「吾が宗汝に到つて大いに世に興らん」と言つて彼を称えているものだが、その中で二人は次のような問答を交わしている。

臨済玄禪師、黄檗に在りて松を栽ゆるの次で、黄檗問うて曰く、深山裏に許多の樹を栽えて作麼かせん。玄曰く、一に山門の与めに景致と作し、二には後人の与めに標榜と作さん。(語注) 許多―あまた 景致―風致、美しい景色 後人―後世の人 標榜―人の善行などをほめ称えて人々の前にかかげしすもの)

漱石には、晩年の漢詩の中に「與衆栽松百丈禪」の句も見られ、「高い松」もこの臨済の言葉を踏まえ象徴として用いられていると思われる。そのことは、一郎を発見し、「浄化」と回心に至つた二郎が、その道筋を深く「懺悔」し語るといふ構造に照らせば、それが彼への「標榜」となることから恐らく確かであろう。とすれば、この「高い松」は、臨済がそうしたように、

漱石が二郎を導き手として「後人」を一郎の求めた世界へ誘うべく掲げた「標榜」である。その世界は、「図を披いて地理を調査する人」(「塵勞」四十五)としての自己の「迂濶」(同)と「矛盾」(同)を知りながら、尚「藻掻いてゐる」(同)一郎自身には至り得ぬ世界だつたには違いない。しかし、一郎を発見し、「浄化」と回心に至つた「今」の二郎が、自他に「誠実」(「塵勞」三十六)であろうとした一郎の「純粹な一本調子」(「兄」四十三)を見出し「相應の尊敬を払ふ見地を具へてゐる」(同)と語つてゐるように、男も女も「一つ」であるような世界を求めた一郎の「精神」は、そうした二郎の中に受け継がれ息づいていると言へる。二郎を信じ、「本式の本当」を語ることを買いた一郎の「態度」が、「向の隙を見て事をするのが賢いのだ」という「利害の念」を「人形」のように身につけ一郎を偽るに至る陥穽となつていた二郎の二つの諦念―異性に引かれ、同性に反発心を募らせる自己の「我儘と嫉妬」を「露骨に云ふ事が出来」ず、その「卑怯を抜く事は到底出来ない」としていた諦念と、「世の中で本式の本当を云ひ続けに云ふものは一人もない」(「兄」四十一)としていた諦念―を突き、彼の間人観、ひいては世界観を根底から覆し、そのことによつて一郎の「精神」は見出され、二郎に受け継がれた。一郎の発見による二郎の回心とはそのようなでき事であり、それはまた一郎の求めた世界が、二郎の世界に代わる新たな秩序を持つた世界として見出されるでき事でもあつた。そして、漱石がその世界への「標榜」を掲げているように、「行人」とは一郎の求めた世界へと「後人」を誘う作品なのであり、その時、「行人」を執筆する漱石の意識が、

文字通り「後人」にまで届いていたとすれば、この作品の持つ意味はいよ／＼大きいと言わなければならないであろう。

以上述べてきたように、一郎を発見し、「浄化」と回心に至った二郎が、深く「懺悔」し語っている『行人』の道筋は、一郎の求めた世界へと通じている。そのような『行人』の世界は、従来伊豆氏を初めとする諸家に指摘されてきたような破綻した世界では決してなく、むしろその各章が、またその言葉が、有機的にかつ緊密に結びついた世界を形成しているように思われる。そして、そうした『行人』の中で、常に解説を促す謎のような存在としての一郎は、私にはまだまだ尽きせぬ魅力を湛えた人物であり、今後の研究の課題である。いずれ改めて論ずることとしたい。

注1 「『行人』論の前提」（日本文学）昭44・3 因に、宮井一郎氏は「男性の『性』そのものに内在する我執」の追求を『行人』の主題とし（漱石の世界）昭42・10 講談社）、また吉田俊彦氏は「死をも覚悟した不逞な諦念の上に妖しく開き直っている直の魅惑の謎に女性の『性』そのものに内在する我執と聖女性を見据え、それを中心にして『心付かない暗闘』を起こす男性の『性』そのものに内在する我執とその迷妄性を捉えようとする主要なモチーフ」（『評言と構想』昭54・6）を読み取り、私見に通ずる見解を示しているが、いずれも性の力に対峙する一郎の存在のあり方を見落しているために、分裂説を提出することとなっている。

2 拙稿「夏目漱石『行人』―その全体像―」（『稿本近代文学』17、平4・11）

3 「『行人』論・言葉の変容」（『国語と国文学』昭57・10）

4 「魔術としての文学―夏目漱石論」（昭62・11 沖積舎）

5 「蛇の記録、〈聖者〉の語録―私説『行人』―」（『敍説』平2・1）（3）に同じ。

6 「交通する人々―メディア小説としての『行人』―」（『日本の文学』8、平2・12 有精堂）また、重松氏はHが「〈聖者〉の語録の名もなき記録者、伝聞者に徹すべき存在だからではないか」という見解を示している（5）。

7 「偽の器」からは重も除かれている。そして、一郎が彼らを「偽の器」としなかつた根拠は、藤沢氏の指摘しているように（3）、彼らが未だ結婚していない存在だということにあるが、しかしそのことと私見とは矛盾しない。

8 （4）に同じ。

9 伊藤古鑑『公案禅話』（昭51・3 大法輪閣）に拠れば、『臨濟録』に挙げられている「臨濟栽松の因縁」を、『鉄笛倒吹』が第十八則に公案として取りあげているとのことである。引用は『公案禅話』に拠った。

10 大正五年八月二十三日付「無題」

（筑波大学大学院 博士課程文芸・言語研究科 日本文学）